

## サルトルとbiographie : サルトルにおける伝記的アプローチ

著者	川神 傅弘
雑誌名	仏語仏文学
巻	15
ページ	47-65
発行年	1986-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017468">http://hdl.handle.net/10112/00017468</a>

# サルトルと biographie

——サルトルにおける伝記的アプローチ——

川 神 傳 弘

## 1. ——未完の biographie——

M. de Rolleston était fort laid. La reine Marie-Antoinette l'appelait volontiers sa «chère guenon»<sup>1)</sup>.

*La Nausée* の冒頭“木曜日午後”主人公 Antoine Roquentin は、既に3年にわたり自らの研究対象としている歴史上の人物 le marquis de Rolleston ド・ロールボン侯爵に関する、Germain Berger の手になる文献を読んでいる。顔は醜くかったが、王妃マリー・アントワネットをして、親しみを込めて“私の尾長猿さん”と呼ばしめたその男はさりながら、Il avait pourtant toutes les femmes de la cour<sup>2)</sup>。宮廷のあらゆる女性をものにした艶福家でもあった。

ド・ロールボン侯爵は大革命当時、ミラボーらと親交のあった人物であったが、1720年パリ失踪の後 On le retrouve en Russie, où il assassine un peu Paul I<sup>er</sup><sup>3)</sup>。ロシアにあらわれ、パーヴェル一世の暗殺に幾分かかわりをもち、その後、インド、シナ、またトルキスタンなどで Il trafique, cabale, espionne<sup>4)</sup>。商売をしたり、陰謀を企てたり、スパイを働いたりしている。

1813年パリに戻った侯爵は il est l'unique confident de la duchesse

---

1) *La Nausée*, Le livre de poche, 1968, p. 24

2) *ibid.*, p. 24

3) *ibid.*, p. 24

4) *ibid.*, p. 24

d'Angoulême<sup>5)</sup> . アングレーム公爵夫人の唯一の腹心の友となったことから遅まきながらも前途が開け、En 1816, il est parvenu à la toute-puissance<sup>6)</sup> 絶対的な権力を掌中にし Par elle, il fait à la cour la pluie et le beau temps<sup>7)</sup> この老婦人のお蔭で、彼は宮廷内に雨を降らせるも晴れにするも意のままの身分(全能)となる。<sup>よわい</sup> 齡70にして絶世の美女 M<sup>lle</sup> de Roquelaure ド・ロクロール嬢と結婚したが、7ヶ月後、accusé de trahison, il est saisi, jeté dans un cachot où il meurt après cinq ans de captivité<sup>8)</sup> , 謀叛の罪で訴えられ、逮捕され、投獄、5年の牢獄生活を死によって終えた人物 le marquis de Rollebon が、Comme il m'a paru séduisant<sup>9)</sup> 10年このかた我らが protagoniste ロカントンを魅了しつつけていた。

フロベールの *Bouvard et Pécuchet* の両主人公同様<sup>10)</sup> , 年金生活者であるロカントンは、à partir de 1801, je ne comprends plus rien à sa conduite<sup>11)</sup> , 1801年以後の彼の行動を探るため、また、Rollebon a-t-il ou non participé à l'assassinat de Paul I<sup>er</sup> ? Ça, c'est la question du jour<sup>12)</sup> ロルボンが実際パーヴェル一世の暗殺に加担したのかどうか等を調査するため、la plupart des documents qui concernent les longs séjours en France du marquis sont à la bibliothèque

5) idid., p. 24

6) idid., p. 24

7) ibid., p. 24

8) ibid., p. 24

9) ibid., p. 24

10) フロベールが年金生活者ブヴァールとベキュシェの二人を組上にあげて、侮蔑と憤りをこめてブルジョアの下劣さを描いた作品はサルトルのロカントンの像の形成に一役買っていると思われる。

11) *La Nausée*, p. 25

12) ibid., p. 28

municipale de Bouville<sup>13)</sup> 侯爵のフランス長期滞在に関する殆どの文献が収められている Bouville ブーヴィル市立図書館に、この三年越し通いつめているのだが、今にしてロカントンは、それら有り余るほどに膨大な資料の山を前にして、

Au fond, qu'est-ce que je cherche ? Je n'en sais rien. Long-temps l'homme, Rolleston, m'a intéressé plus que le livre à écrire. Mais, maintenant, l'homme... l'homme commence à m'ennuyer<sup>14)</sup>.

ド・ロールボンを取り巻く過去の歴史的諸事件が彼の情熱を掻立てる力を失っていることに気付くのである。同時に、「存在」が異様な装いをまとい（事物の有効な装置の関係が崩壊し、ものの意味という外皮が剥がれた状態）、彼に《吐き気》を催させ、ロカントンを脅迫し始め、ついに彼を一種のノイローゼ状態に追い込んでしまうのである。

もっとも、作中、この「嘔吐」は生理学的な直観形式を体裁としてとってはいても、

——わたしの方は個有の意味でのこうした《吐き気》は一度も感じたことがない<sup>15)</sup>——

とサルトルが後年述懐するように、あくまでも小説形式の中に組み込まれた“哲学観念の形式化”<sup>16)</sup>に過ぎないが、ともあれ

du présent, rien d'autre que du présent (...) La vraie nature du présent se dévoilait: il était ce qui existe, et tout ce qui n'était pas présent n'existait pas. Le passé n'existait pas. Pas du tout<sup>17)</sup>.

ロカントはその属性が醜悪、淫猥としか感じられない「即自存在」に圧

13) *ibid.*, p. 25

14) *ibid.*, p. 136

15) Alexandre Astruc 他, サルトル自身を語る, Édition Gallimard, 1977, 人文書院, 1979, p. 59

16) *ibid.*, p. 60

17) *La Nausée*, p. 137

倒され、因果律や関係性<sup>18)</sup>を拒絶する、contingence 偶然性の支配する「現在」にのみ心を奪われ、彼にとって現在でないものはすべて存在しないものとなってしまう、かくして、Rollebon n'était plus, plus du tout<sup>19)</sup>。ド・ロールボンはロカントンの歴史的興味の範疇を逃れ去り、S'il restait encore de lui quelque os, ils existaient pour eux-mêmes, en toute indépendance, ils n'étaient plus qu'un peu de phosphate et de carbonate de chaux avec des sels et de l'eau<sup>20)</sup> 塩分と水分を含む磷酸塩と炭酸石灰の塊でしかない骨片としての<sup>ひから</sup>溜びた現在の意味合いを滞びたものへと墮してしまい、

Je n'écris plus mon livre sur Rollebon; c'est fini<sup>21)</sup>, ロカントンは le marquis de Rollebon の biographie 制作の筆を折るに至る。

## 2. —挫折の土壌—

この件に関して Douglas Collins は The failure of Roquentin as biographer can be attributed in part to an inadequate method and a failure of will after discovering the proper tool within his grasp<sup>22)</sup>。ロカントンの「伝記作者」としての挫折について、獲物に挑むために採用した武器は妥当であったが、その扱い方（方法論）が未熟で、また意欲に欠けるところがあったためであると云う。

Collins は Although it is a tradition to begin an account of the formative influences on Sartre with the impact of Edmund

18) 関係性の拒絶に就いては、旧稿——サルトル：スカトロジーへの郷愁——を参照されたい。

19) La Nausée, p. 139

20) ibid., 139

21) ibid., 136

22) Douglas Collins, Sartre as Biographer, Harvard University press, 1980, p. 9

Husserl<sup>23)</sup> サルトルが効果的影響を受けた先人としてフッサールを認めることにやぶさかでないが、a study of Sartre as biographer must take into account the influence of Bergson which predates that of Husserl<sup>24)</sup> 初期のサルトルの仕事（ロカントンの伝記制作等）を研究するには、フッサールに先立って影響を蒙ったベルクソンを無視することは不可能であるとする。

つまり、ベルクソンの、人格を personality has a unity which must be grasped through intuition or “sympathy”<sup>25)</sup> 直観と共感を通して把握さるべき統一体と見る認識方法の援用に未熟さがあったと云うものだ。If he had been a careful reader of Bergson, as Sartre was, his life of Rollebon might have been less painful<sup>26)</sup>. ロカントン (protagoniste) がサルトルほどに思慮深いベルグソンの読み手であったならば……と Collins は語る。今少し詳細な彼の言い分に耳を傾けよう。

Roquentin is initially disturbed by the fact that the only way of making sense of the shards of Rollebon's life is through constructing hypotheses that derive from the imagination rather than from facts<sup>27)</sup>. ロカントンは、事実からよりもむしろ想像力から得られる“想定乃至仮説”を創り上げることによってド・ロールボン像を構成することに腐心するが、これは His realization that the characters in a novel seen more true than the real...<sup>28)</sup> 彼の、現実以上に小説中のキャラクターに真実を感じる性癖に由来するというものだ。

つまり、意識の分析によって生じる結果として得られた幾つかの固定観

23) *ibid.*, p. 9

24) *ibid.*, p. 9

25) *ibid.*, p. 9

26) *ibid.*, p. 9

27) *ibid.*, p. 9

28) *ibid.*, p. 9

念を連合させる方法を通して人格像を形成するという、従来の連想心理学を批判する立場（機械論的な实在把握の拒否）に立つベルグソンの“直観による認識体験の伝達”が、ロカンタンの精神風土の形成に一役買っているということである。Mais on pourrait se demander si les difficultés insurmontables que certains problèmes philosophiques soulèvent ne viendraient pas de ce qu'on s'obstine à juxtaposer dans l'espace les phénomènes qui n'occupent point d'espace<sup>29)</sup>, 空間を占めていない諸現象を空間内に並置しようとこだわることから諸々の哲学上の問題が生じるのだとするベルグソニズムの前提は Quand une traduction illégitime de l'inétendu en étendu, de la qualité en quantité, a installé la contradiction au coeur même de la question posée, est-il étonnant que la contradiction se retrouve dans les solutions qu'on en donne<sup>30)</sup>? 非延長的なもの〔広がりを持たないもの〕を延長に、質を量に、不当に翻訳した結果として生じた矛盾を突くものであり、質の世界への量の介入、もしくは空間的なものの介入を厳しく拒絶する。物質世界が、広がりをもつ同質のものが空間に同時に並存してくり返しの行われる因果必然の世界であるのと異なり、精神世界は、異質なもの同士が相互に滲透し合って、時間的持続の中で絶えず創造作業の進められている durée pure「純粹持続」の世界であるとするもので、この純粹持続の内面的世界は、直観によってのみ把握されるというものである。

かくして、Intuition places itself, through an effort of the imagination, within the dynamic subject<sup>31)</sup> 直観は想像力の作用を通して顕現するという側面が、ロカンタンの想像力固執あずかに与るわけである。

しかしながら、より単的にロカンタンの biographie 制作の挫折を語れ

29) Henri Bergson, Essai sur les données immédiates de la conscience, Félix Alcan, 1929, avant-propos

30) ibid.

31) Sartre as Biographer, p. 9

ば、註17の降りの示すように、要するにロカタンにとっては *du présent* 現在が、*rien d'autre que du présent* 現在のみが意味をもつものとして感じられたわけで、*Le passé n'existait pas*. 過去は存在しなくなっていたのである。

“過去というものが、それ自体 *ex-sisto* (外に一立つ) しようがない” という意味で、物化したもの(「即自存在」)であり、当時のサルトルが *schématiser* 図式化した、「対自存在」を含む人間存在(実存)の理想的モデルから見て、物化したものへの傾倒はそのこと事体、旧守的モラルや *conformisme* の信奉を容認する結果を生じるが故に、未来と進歩の観念を基本原理とするサルトル的存在論とは相容れないものであったという哲学的側面が大いに影響したであろうことは改めて言うを俟たない。

いずれにせよ、著者(サルトル)は『嘔吐』の主人公 *Roquentin* に *biographie* 制作の筆を折らせてしまった。

が、現実には、彼は自分自身の自伝 *Les Mots* を含め、数々の *biographies* を世に問うことになった。*Baudelaire, 1946, 1947*・*Saint Genet, comédiant et martyr, 1952*・*Mallarmé, 1953, 1979*・*Le Tintoret, 1957, 1966, 1981*・*Les Mots, 1964*・*L'Idiot de la famille, 1971, 1972*……こうした事実は一切何を物語るか? 限られた紙数の上で大ざっぱに検討を加えてみよう。

### 3. —再び *biographie* へ(哲学的要請)—

—もしも一個の真理とも呼ぶべきものが人間学のうちに存在することができるはずであるとすれば、それは全体化作用となつたはずであるし、そうなるべきである。<sup>32)</sup> —

サルトルが *Question de méthode* に於いて承認ずみのこととしてみなすところの「歴史として、また歴史的真理としてみなした全体化作用」

32) J.-P. Sartre, 方法の問題, 人文書院, 平井啓之訳, 1966, p. 6

とは、歴史的・時間上に於ける進行中の統一作用のことである。周知の如く、*Question de méthode* 以降のサルトル哲学の鋒は“マルクス主義の内部に人間を回復させること”に向けられるが、こうしたポイントに至る経緯は以下の過程を辿る。

人間事象が、決して認識に還元できないことをふまえながらも、ヘーゲル的には客観的現実性のなかで人間を把え、またキェルケゴール的側面からは人間実存の特殊性を確認した点に、サルトルはマルクスの論理的妥当性を認めかつ共鳴する<sup>33)</sup>。彼は“このような条件のもとでは、観念論に対する観念論者の異議申し立てである実存主義がすべての効用性を失い、ヘーゲル哲学の退潮をこえて生きのびることがなかったことは当然であると思われるだろう”と語る。

ところが、“理論と実践の分離はその結果として、実践を原理を欠いた経験主義に変え、理論を純粹で凝結した知に変えてしまった”<sup>34)</sup>と語るように、非現実主義と盲目的プラグマティズムに墮し、〈観念論的唯物論〉として硬直してしまったマルクス主義は、人間実存を観念のなかに取込んでしまったのである。以後のサルトル哲学は、この観念のなかに吸収されてしまった《人間》というものを、若干ヘーゲルに対抗したキェルケゴールの意味合いから、ユマニスムとしての具体的な人間学を通して再理論化する試みとなり、かくして状況と自由というテーマは、全体性と多様な個別者という対蹠的位置に設定されたターム相互のせめぎ合う姿を中心に展開する。

具体的な歴史の進行過程に於ける統一作用を全体化としてみる時、他人及び世界との関係によって決定され、歴史のなかに統合されてゆく個別者は、全体化の主体であることは勿論であるが、反面、全体化される受動的存在でもあり、ここに全体性と多様な個別者との相克、つまり、全体性のなかでの個人的営為の無効性の問題が、人間存在の〔疎外〕という形態を

33) *ibid.*, p. 22

34) *ibid.*, p. 30

纏う。というよりはむしろ、サルトルの存在論は〔弁証法的理性〕と名づけられた実存と知のダイナミックな関係を図式化し、追跡し続ける作業に変質するのである。

ところで、〔疎外論〕としてのサルトルの存在論は、これが、いわゆる parole のゲーム、或いは“言葉の遊び”としての形而上学の範疇にとどまる限り、その有効性を十全に発揮し得ないのである。

例えば、Albert Camus は〔被疎外〕の心境を“étranger”のイメージに描いたが、そうしたカミュの技法が、我々に痛切に訴えかける何物かを探るとすれば、彼の援用した文体が“小説”乃至は“エッセー”(Sisyphé)であった事実に思い至るであろう。個々の実存の生々しい喘ぎ、また息吹きといった営為は、“哲学”という理論構築の専門用語の行き違う場所では伝達能力を弱める。

晩年、サルトルは、

S. de B. — Je trouve que la *Critique de la raison dialectique* fait drôlement avancer la pensée ! ボーボワールの『弁証法的理性批判』への肯定的賛辞に対して、

J.-P.S. — Est-ce que ce n'est pas encore un peu idéaliste<sup>35)</sup> ? (あれはまだ幾分観念論に過ぎるのではなからうか?) 若干否定的ニュアンスを含む受けこたえをしている。個人的実存と他者及び世界の関係を、また人間存在を全体に位置づける条件を究明する方法論としての実存主義的精神分析は、今少し具体的な(歴史のなかに位置づけられた)事例を検証することを要求するのである。ここに、biographie 登場の理由も生じてくる。つまり、状況ののりこえと疎外の超克の問題は、まずその前提として疎外の実態の露呈を要求するのである。

#### 4. — キー・ワード：他者 —

疎外論展開にあたり、サルトルが方法論的に依拠した武器としての mot

---

35) Simone de Beauvoir, *La cérémonie des adieux suivi de Entretien avec Jean-Paul Sartre*, Gallimard, 1947, p. 215

clef キーワードが *altérité* と呼ばれる〔他性〕乃至〔他者性〕である。*autre* 他人, *autrui-objet* 対象—他者, *être-pour-autrui* 对他存在等々の〔他〕を殊更に意識した語彙群, 分けても, *autrui* 他者, *les autres* 他人等のタームに, サルトルは軽重深淺様々なニュアンスを託し, ひたすら〔疎外〕を克明に描出する効果をねらっているように思える。

「即自存在」*être-en-soi* であると同時に「対自存在」*être-pour-soi* でもある矛盾的綜合体としての人間存在の悲劇性は, 人間が意識の動物であること, すなわち, 人間の対自性に由来するとサルトルは語る。つまり, 意識的存在たる人間は, 常に, 何ものかについての意識であると同時に, 何ものかについての意識についての非反省的意識(自己意識)であるという本質構造を有するが故に, 自己意識をもつ意識には常に裂け目が生じ, その裂け目の間の距離が人間の意識の自由の源泉であると同時に, 人間が悲劇的存在であることを決定づけると言う。こうした意識の交感の場が個人的実存相互間に移された場合, ここに〔他者〕の問題が大きく浮かび上がることになるのであるが, 悲劇性は更にそのアクセントを加える。

自他の人間関係に於ける意識の相互交流の原初的シエマを, サルトルは「眼差し」と, その眼差しに由来する「他者性」の意識の構造に求める。詳しくは, 旧稿——『他者』意識の〔実在〕と〔非実在〕——第一章「他者性」の意識を生む「眼差し」の構造<sup>36)</sup>——を参照されたいが, かいつまんでその経緯を述べておく。

出会いによって我々に現前する〔他者〕は一つの現象であるとサルトルは説く。*Autrui est un phénomène qui renvoie à d'autres phénomènes: à une colère-phénomène qu'il ressent contre moi, à une serie de pensées qui lui apparaissent comme des phénomènes de son sens intime...*<sup>37)</sup> この現象は, 他者が私に感じる〔怒り—現象〕や, 彼の〔内的感覚〕の諸現象として彼にあらわれる一連の思考であり, *l'apparition*

36) 関西大学文学論集 第33巻 第3号, 1984

37) J.-P. Sartre, *L'être et le néant*, Gallimard, p. 280

d'autrui dans mon expérience 私の経験の中への他者の出現は、身振り、表情、行為などの組織的形態をとって現われるが、その折り、殊更に他者意識を惹起する契機が「羞恥 (la honte est honte de soi devant autrui)」を覚えさせる他者の眼差し (regard) であり、この眼差しは逆に私をして一つの「他者」に眨しめる機能を有つ。la honte...est honte de soi, elle est reconnaissance de ce que je suis bien cet objet qu'autrui regarde et juge<sup>38)</sup>。眼差しは私を objet として扱いか「即自存在 (物)」として把握するので、その眼差しが他者へと持ち帰る私の像は、まったく他者のひとり合点になる。このような関係に生じた私は ce moi qu'un autre connaît 或る他者が認識する私, ce moi que je suis, je le suis dans un monde qu'autrui m'a aliéné<sup>39)</sup> 他者が私から奪って他有化した世界の中の私にすぎないのである。

他者の眼に映る私は、私が私自身に対して抱いているイメージとは異なる私であろうという疑惑、或いは、その時点で私が私に抱くイメージ以下の私であろうという反省意識が羞恥をもたらし、更に、本来、未来志向的人間の性癖としてもつ、今ある自分でない、より向上した自分のイメージへの努力によって、未来の理想の姿に求めている自己の真のイメージと眼差しの持ち帰るそのギャップの欠如分 (manque) がもたらす他有化の領域が、羞恥以上に「癩にさわる気分 agacement」、また「怒り colère」を感得せしめ、私を aliéner (自主性や人間性を奪う) すると言うものである。

ここに、aliénation [主体性を奪われること、自己喪失、疎外または精神異常] という名の疎外のドラマが始まるのである。私が他者の眼差しの対象になってしまう、「対他存在」être-pour-autrui と化してしまうというこの原初の図式は、いわば一つの〔不条理〕の顕現化であり、如何ともし難い人間の在り方 condition humaine (人間の条件) でもある。

38) *ibid.*, p. 319

39) *ibid.*, p. 319

こうした疎外の有り様を、具体的な歴史のなかに、また対社会的拮がりのうちに、或いは実存的な心理分析的側面から掬い取るに恰好な舞台は、サルトルの得意とする戯曲以上に果して *biographie* であつたらう。

##### 5. — 性癖に由来するサルトル的批評原理 —

サルトルは終生 up-to-date な情報に敏感であつた。同時代に生起する様々な問題に過敏に反応し、時流の先頭に立ち、或る意味では時代を先取りする言動に彼の真骨頂があつた。加えて、優秀なノルマリアンとしての矜持は常に彼をして *nouveau-né* の問題に関与せしめた。次々と出来する諸現象で、自分の“知らない”事柄の残されることに我慢の出来ない性格であり、更に、

S. de B. — Oh oui. Qu'était-ce au juste cette idée de génie, inhérente selon vous au fait même de vouloir écrire? (書くことを欲する事実そのものに本質的に属している、その天才の観念とは一体何か?)

J. - P.S. — Ce qui est inhérent, en fait, c'est qu'on écrit pour faire quelque chose de bien: pour faire sortir de soi quelque chose qui ait une valeur et qui vous représente<sup>40)</sup> ... (それは、人が何か良いものを創り出すために書くからであり、自分の中から何か価値あるもので、その人の代理となるものを引き出す為めに書くからである) 書くことを欲する人間には天才が備わっているという自負がこれに加わる。“Tu dois donc tu veux<sup>41)</sup> 汝なすべきが故に、なし能う” とするカントの考えに由来する自己拘束から導かれる一種の天才主義が Je choisissais de faire une oeuvre; je choisissais ce que j'étais fait pour faire<sup>42)</sup>. 彼に創作し、創作すべく生まれたことを選ばせた。

40) La cérémonie des adieux, p. 196

41) *ibid.*, p. 197

42) *ibid.*, p. 197

また、こうした心的傾向と並行して、サルトルには彼の育った時代の大家であったアンドレ・ジッドらの〈誠実礼賛〉の残滓が尾を引いており、l'intellectuel refuse le bonheur. Baudelaire écrit à Janin: 《Faut-il qu'un homme soit tombé bas pour se croire heureux<sup>42)</sup>》知識人は幸福を拒絶するものだとする、いわばストイックな物の見方と行動様式に走らせる「誠実さ」への狂おしい欲求がうかがわれる。例えば、神なき人間の悲惨を、絶望的に苦しむ詩人に対しても Mais la plupart ne vont pas jusqu' au bout: ils lâchent en cours de route, ils se laissent aller au vague, à l'ennui, aux passions, au narcissisme pleurnicheur<sup>43)</sup>。詩人の実人生と作品の間にある不徹底な緊張と、不徹底な掘り下げ振り（倦怠、情念、お涙頂戴のめそめそしたナルシズムでお茶をにごすあいまいさ）に mauvaise foi の烙印を押すほどに徹底したものであり、かく、透徹した「誠実さ」への欲求は、Un malin qui avoue, les yeux baissés: 《Je sais que je ne sais rien》, c'est peut-être Socrate; un imbécile qui prend l'air fat pour dire 《je ne sais pas<sup>43)</sup>》「私は自分が何も知らないことを知っている」とするソクラテスの態度を、「私は知らない」と言うためにうぬぼれた格好をして見せる馬鹿者であり、ずる賢い男だと断定するまでに容赦のないものである。彼は人間の知識に自ら限界を画する者を赦さない。il (Socrate) prescrit des limites à la connaissance humaine avec l'allègre résignation des classes moyennes<sup>44)</sup>人間世界に生起する問題は、人間自身の手で処理しうるものであり、またかくあるべく可能性を追求する方向で jusqu' au bout 徹底的に考え抜き、論議が尽くされなければならない、「分らないことは解らない」とする安易な諦念は中産階級の逃げ口上であり、「誠実さ」への冒瀆なのである。この意味で、サルトルは“沈黙”というものを

---

43) Michel Sicard, OBLIQUES Numéro 18-19, Borderie, p. 179  
(L'engagement de Mallarmé)

44) ibid., p. 184

いうものを決って評価しない人間でもあった。

しかしながら、実存主義のジャンセニストと称されうるまでにストイックに「誠実さ」と「純粹さ」を透徹しつつも、一方、常に新奇なものに挑戦せずにはおれない、何ものをもゆるがせにせぬ全的人間の把握を試みるこの時代の寵児も、構造主義には否定的であった。ボーヴォーワルの証言に耳を傾けよう。

Dans le quatrième volume de *L'Idiot de la famille*, il se proposait d'étudier *Madame Bovary* et, toujours soucieux de se renouveler, il voulait utiliser des méthodes structuralistes. Mais il n'aimait pas le structuralisme<sup>45)</sup>. 例によって新境地を拓きたがっていたサルトルは『ボヴァリー夫人』研究に、構造主義的方法を採用したがっていたようだ。が、彼は構造主義を好まなかった。何故か？若干長くなるが、その説明（理由）を引用、翻訳しておこう。

Il s'en est expliqué: «Les linguistes veulent traiter le langage en extériorité et les structuralistes, issus de la linguistique, traduisent aussi une totalité en extériorité; c'est pour eux utiliser les concepts le plus loin possible. Mais je ne peux me servir de cela car je me place sur un plan non scientifique, mais philosophique, et c'est pourquoi je n'ai pas besoin d'extérioriser ce qui est total.<sup>46)</sup>» ——彼はその件についてこう説明した。「言語学者は言語を外在性において扱おうとする。そして、言語学者から派生した構造主義者達もまた一つの総体を外在性として翻訳してしまう。それは彼らにとって可能な限り概念を自分から引き離して利用することを意味する。だから、私はこれを使うことは出来ない。なぜなら私は科学的平面にではなく、哲学的平面に位置するものであるからだ。そして、それ故に私は総体的なものを外在化する必要がない」 ——

---

45) La cérémonie des adieux, p. 50

46) ibid.

言語を外在性において扱うとは何を意味するのか？例えば彼は *L'engagement de Mallarmé* のなかで、或る種の詩人に反発して、そうした詩人に於いては *la situation poétique n'a pas été vecue*<sup>47)</sup> (詩人のテーマをなす) 詩人の情況は生きられなかったし、*il ne s'est trouvé personne pour intérioriser ses postures, ces conduites et ces mythes*<sup>48)</sup> それらの姿勢、行動、神話を内在化するための人間は一人もいなかった。chacun les emprunte plus qu'il ne les crée, personne ne les pense, on les accepte parce que les Autres sont supposés les penser. Anonyme, prise, rejetée, reprise éparse en une multitude d'esprits distingués et médiocres, l'Idée poétique reste au-dessous d'elle-même, chose beaucoup plus que pensée: des choses dues à l'inertie et l'extériorité<sup>49)</sup>. 各々がそうした詩人の情況を創るというよりむしろ借用したのであり、「他者」がそれを考えるにまかせて、自分はそうした情況を考えることもしない。取り上げられては捨てられる、彼らの *Idée poétique* 詩的観念は思考であるよりむしろ事物であった。無気力と外在性に由来する事物としての...

こうしたサルトルの異議申し立ては、果して「誠実さ」を貫かんとする彼流の原理の証しである。吐かれる言葉、書かれた文字、記録される観念や情況が、主体との有機的な関係を失って、空間や紙面を舞い踊り、或いは作品から目を離すや、また或いは一担脱稿してしまうや否や、paroles も Idées も主体とは無縁なものとなす態度は、彼の批評原理と噛み合わないものである。従って、例えば只管作品自体、表記された言語世界にのみ理解の範囲を限った上で、signifié を signifiant に結びつける関係の図式構造化作業に終始する Barthes 流のヌーヴェル・クリティクなども、伝記的アプローチ、対社会的拮がり、歴史的観点を含む、より

47) OBLIQUES, p. 179

48) ibid.

49) ibid.

グローバルなサルトルの批評態度と相容れないものなのである。因みに、サルトルは *La cérémonie des adieux* (p. 198) に於いてボーヴォワールに語っている。

J. - P.S. — Je pense maintenant que le style ça ne consiste pas à écrire de belle phrase pour soi, mais des phrases pour les autres... (私は今、文体というものは自分のために美しい文章を書くことではなくて、他者達のために文章を書くことによって成立すると考えている。) 彼の批評原理を単的に表わす言葉ではなかるうか。

自由の観点から常に人間把握を試みていた時代を経て、サルトルは何時の日か *aliénation* 疎外の視点で人間を見つめ直すに至ったが、彼が、その立場にある限り、サルトル的批評態度は、テキストを無視するものでは勿論ないが、テキストにかける比重と同等に、またそれ以上に、その作品の舞台となる時代と社会、また登場人物や作者の行動及び心の動きを射照してくれる文献を重視することによって、必然的に〈倫理性〉を提示してしまう種類のものである。フォルマリズムなどのような確固たる純粋理論による形而上学的構造の背景を為す科学的客観主義に行き過ぎを認めるや、彼は一転フッサール流の (*Zu den sachen selbst.*) 事象そのものへのという生体験へのフィード・バックを試みるのであり、こうした彼の客観主義と主観主義の間のリヴェーシブルかつフレキシブルな批評態度は、果して、彼がフランス・モラリストの延長線上の人であったことを物語る、と同時にそうした倫理性を必然的に伴う彼の *écriture* (書く行為) には *biographie* が不可欠な領域であったといえる。objet としての一つの人格を研究し表現する行為は、彼にとって自分自身を見つめ直し、自分自身を表現することを意味し、それはとりもなおさず objet を内在化し、自らと objet の混然一体となった溶液から、新しい化合物としての理想的モデルたる“人間像(観)”を創造する道程を示すものとも云える。

## 6. —angle négatif—

人間の意識の本質をその否定性に見るサルトルの基本的視座は、人物批

評の着眼角度に négatif な指向性を、また、批評対象の枠組みを自ら否定性、他者性を背負った人々に限ってゆく。パリの娼婦の私生児として生まれ、乞食、浮浪者、強盗、男色者として、自らの存在理由を対社会的にその否定性に見出さざるを得なかったジャン・ジュネ、母親がオーピック将軍と再婚したことで、母子の密月時代に終止符を打たれ、「他者性」を味わった末に拗ね者となってしまうボードレールなどが、その典型である。

要するに、サルトルが批評対象として採用する人物は、好むと好まざるとを問わず、被害者の立場に立たされ、被害者意識を背負い込んだ人々であり、分けても、それら人物が過剰な自意識から“羞恥”を味わう弱点、欠点の実存的生体験にメスを入れる作業から彼の実存的精神分析が始まる。つまり、サルトルの biographie は altérité<他者性>からのアプローチという、一つの négatif な極面の拡大と深化の方法を得て初めて成立可能な産物であったと云うことが出来る。

かくして、冒頭に羅列した如く、ド・ロールボン侯爵に関するロカントンの批評処理に欠けていたのは一にこの angle négatif であり、挫折の一因を担うものであったと云えよう。事実、遺稿となった *L'Idiot de la famille* フロベール論もやはり、フロベールの幼少時に認められた naïveté (愚鈍さ) に由来する mélancolie native (生来のメランコリー)、またその mélancolie から派生する la crise de nerfs (神経発作)、égarement (錯乱)、hébétude<sup>50)</sup> (精神朦朧) 等々、フロベールが *Ce qu'il faut tenter de savoir, c'est l'origine de cette plaie 《toujours cachée<sup>51)</sup>》* 知りたがっていた、普段はかくされていた、その古傷の解明から説き起こされ、幼少時のフロベールが un enfant demeuré<sup>52)</sup> 知恵遅れの子と看做されていた事実、また、出来の良い兄 Achille と比較される

50) J.-P. Sartre, *L'Idiot de la famille*★, Gallimard, 1971, (Lire, Naïveté, Naïveté et langage)

51) ibid.

52) ibid.

ことによって、輪をかけて助長される *altérité*〈他者性〉、更に、女の子を望んでいた母親 Caroline の期待に反して生まれおちたにもかかわらず Caroline *était femme de devoir*<sup>53)</sup> 愛情のない義務感から過保護に育てられ *L'agressivité de Gustave n'eut pas l'occasion de se développer*<sup>54)</sup> 育たなかった攻撃性故に *Réduit à la contemplation de sa passivité, l'enfant ne peut savoir qu'il a la structure d'un signe et que le dépassement vivant du vécu est, en lui comme en chacun, le fondement de la signification*<sup>55)</sup>。自分の *passivité* (受動性) を見つめる状態へと追い込まれ、自分も意味作用の基礎であることを自覚しえない、*Ainsi le langage lui vient du dehors*<sup>56)</sup> 言語が外部からしか到来しない子供に形成されてゆく過程が述べられる。

しかしながら、一見恣意性に委ねられているかに見受けられる、生体験に発する他者、他者性、受動性等の *néгатif* な概念は、彼にとって一つの攻撃目標であると同時に、彼が生得に有つニヒリズムへの偏愛を満足させる否定性の契機を明らかにしてくれるタームでもある側面を見逃がしてはならない。個人的実存の古傷から説き起こしてゆく彼の「疎外論」は、他者と主体のせめぎ合う地獄絵図の曼陀羅を綾織るものであり、*Alienation is Sartre's name for this ubiquitous monster*<sup>57)</sup>。Collins の語るように *aliénation* は彼の著作の方々に見受けられ *for Sartre alienation forms the crux of his thought*<sup>58)</sup> サルトル理解の鍵を握る術語であることは確かである。但し、この術語の源にある *autre, les autres* 等の語が、サルトルの一連の著作の流れの中で何如に扱われて来たかを今一度検討し直して、*aliénation* なる語の含有諸要素を明確に分析した上でなければ、

53) *ibid.*, p. 13354) *ibid.*, p. 15055) *ibid.*, p. 15156) *ibid.*, p. 151

57) Sartre as Biographer, p. 7

58) *ibid.*

この語に付与された意味を探ることも、定義づけることも不可能であろう。

例えば、*passivité* (受動性) なる語にしてから、彼はこれをひどく忌み嫌うこともあれば、好意的に解釈したりもする。*contre, pour* 両様の対象に揺れ動くのである。同様に初期の戯曲 *Huis Clos* の有名な科目 *l'enfer, c'est les Autres*<sup>59)</sup> (地獄とは他人のことだ) に於いて、むしろ「他人」は加害者、庄殺者の意味合いを帯びていたものが、その後は徐々に被害者を意味するものに変化しているのである。従って、この *autre* (他者) に象徴される彼の一連のキーワードの意味合いを、一つ一つの *biographie* を仔細に検討することによって明らかにする作業が、サルトルの「疎外論」のイメージをより克明に形作ってくれることになるであろうし、残された今後の課題とも云えよう。

(本学助教授)

---

59) *Huis Clos, Le livre de poche, p. 75*